

## ありがたいということ

感謝の思いは、ありがたいという言葉となって現れるものだが、本当にありがたいと、純粹に言える人はすくない。

それは、感謝よりも不足のおもひが多かったり、感謝せねばならぬ点に気がつかぬからで、それも人間が底なしと言ってもよいほどの、深い欲望に追いたてられているせいだと、言えるのではあるまいか。

人間は欲がなければ生きられはしない。では欲にしがみついたらよいのかといえ、欲ばかりしていると、しまいには欲で身をほろぼすようなことにもなる。

欲をしても立ちゆかぬし、欲がなければ生きられぬということは人間が生きてゆく上の大きな問題である。そこで欲にも、してもよい欲、していけない欲があることをさとらなければ、よい生き方はできぬものだというところを、知る必要がある。

金光教でいう「おかげ」という言葉は、その内容がとても深くいろいろの意味をもつものだが、一般には神の力にすがって、不幸から救ってもらふことと解されている。これだけでは、わが国で昔からいわれる、「神佛のごりやく」と同じ意味になる。

こういう意味の「おかげ」だけを求めるのならば、あえて金光教の信心はしなくてもよい。なぜならば、この道でいう信心とは神を自分の願望を叶えるために利用するのでなくて、逆に神の心に従う生き方をすることともいえるし、自分の中にある神の心をひきだすことともいえる。また、自分の願いの元になっている欲をしらべて、よい欲か、まちがった欲かをみわけ、願いのものを整理することともいえるからだ。

もちろん信心には段階があり、はじめはひたすら自分の困っているところを救ってもらいたいと思う。つまり神を利用するようなどころがある。これを頭からけなし、責めるわけにはゆかぬ。人間はとかくそういう生き方になりがちな傾向が強いからだが、決してそのままでよいのではない。自分の手もとをしらべず、困ることになった元もわからずに、がむしゃらに、困らぬ楽なことになりたいと願ひ、自分の都合よくなることだけが、おかげと思うようでは、それは信心でなくて欲にふりまわされているにすぎない。

信心して、欲の整理ができ感謝すべきこと、よろこぶべきことがわかり、有難いという言葉が、胸の奥底から出るようになれば、信心によって救われたといえよう。

故矢代先生を病床にお見舞いした時のことである。死は日時の問題と察せられる病状の中だった。目をさまされた先生は、定まらぬ瞳をこらして私をみつめていられたが、やがて「おかげで、ありがたいです」とポツンとおっしゃった。切ない想いで先生をみつめる私の胸に、それは深くじんとひびいた。深い深い、底しれぬ水の中からひびく声のように感じられたのは、その言葉が先生の心の奥底に堪えられた思いだからと悟って、ひとり私はうなづいた。半歳にわたる重患も先生の心まで蝕むことはできなかったのだ。

ありがたいという心にみちて亡くなった先生は、身をもって神を信じ、神のおかげを悟っていられたのだと、今更に仰がれる。

頭や口先の信心では、この信境には達し得られぬ。

<昭和41年9月15日>